

第十八回受賞作品 中本道代『花と死王』



受賞のことば

この度は、このような栄誉ある賞を頂くことになりました、大変光栄に思います。

この詩集の『花と死王』というタイトルは、古い仏典『ダンマパダ（法句経）』の中の「花を摘むのに夢中になつてゐる人が、未だ望みを果たさないうちに、死神が彼を征服する。」（中村元訳）という言葉から考えました。この言葉は、それであるから、我を忘れて時間を過ごすことのないよう、いつも醒めていなさい、という戒めの意味で語られているのだと思いますが、わたしはそこまで考えないようにして、人間とは「花を摘むのに夢中になつてゐる」ものであり、そして、「望みを果さないうちに」どこかへさらわれてしまうものである、というところまで受け取って、非常に心を打たれたのでした。

花とは人が夢中になつて追い求めるもので、ある人にとっては愛や恋であつたり、ある人にとっては富であつたり、知識であつたり名誉であつたりするのでしょうか。わたしにとっては、それは詩だったのだと思います。花から出る光はだれにとつても暖かく美しく見え、求めずにいられないものなのでしょう。それは、人間だけではなく、すべての生きものにとつての命の

ことなのだと思います。そして、花はただ死王の荒野にのみ、咲いているのでした。

さらに、人は「望みを果す」ことができないで逝かなければならないとも語られています。そのことをわたしはこの上なく悲しく思い、同時に、そこにこそ最も深い意味があるのだと感ぜずにはいられませんでした。この詩集の中に、少しでもその謎に近づいているようなところがあれば、幸せに思います。

この詩集のために絵を描き、装丁をして下さった直野宣子さんと、本を作つて下さった思潮社の藤井一乃さんに心よりお礼申し上げます。そしてわたしの拙い詩集に目を留め、選んでいただきました選考委員の先生方、また御関係の皆様深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

二〇〇九年二月二十五日

中本 道代

選考経過について

二〇〇八年中に国内で刊行された約二百冊の詩集の中から、本年二月十六日、東京で行われた選考委員会において、中本道代詩集『花と死王』（思潮社）を選出いたしました。

この詩集は一見取りつきにくいかもしれませんが。詩の中の場所は切実に夢みられた場所であり、終末の風景であり、時間は自分のあずかり知らぬ時間です。そこで生起する事柄はこの世の論理や情理から離れたところで展開していきます。でも観念的というのではありません。言葉は生硬ではありませんが、しっかりとした手ざわりと輪郭をもっています。一編一編の詩は生と死の謎について突きつめていった結晶とでもいい。独特の領野で一人着実に詩を育んでこられたことに、今後への期待とともに敬意を表したく、私ども選考委員は一致して推挙する次第です。

なお、この他に塚越祐佳『雲がスクランブルエッグに見えた日』（思潮社）、なんば・みちこ『下弦の月』（書肆青樹社）、花田英三『坊主』（ポードーインク）、水無田氣流『乙境』（思潮社）の各詩集が最終候補作品として挙げられたことを報告しておきます。

二〇〇八年二月二十八日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

清水 哲男

高橋 順子

第十九回受賞作品 文月悠光『適切な世界ならざる私』



受賞のことば

この度は丸山豊記念現代詩賞を頂くこととなり、大変嬉しく思っています。また、賞を頂くからには、その重みをしっかりと受け止めたいと強く感じています。

『適切な世界ならざる私』は、私の第一詩集に当たります。十四歳から十七歳までに書いた作品から二十四編を選び、それらと向き合いながら、ひとつの物語を織り成すように、つくりあげた詩集です。一編一編は、別の時期のそれぞれ違った思いで書かれた作品ですが、こうして一冊に編み直すことにより、今まで自分が通り抜けてきた道筋がはっきりと見えたこと

はもちろんです、これからどのように書き続けていくか、生きていくかという指標を得たように思います。

この詩集の『適切な世界ならざる私』というタイトルは、十四歳の夏に書いた詩篇から取ったものです。十四から十五歳の頃、私は“世界”と自分の間に強い違和感を抱いていました。それは自然と作品にも投影されていき、当時書いた詩に傷跡のように生々しく残っています。“世界”を切り結ぶ武器としての言葉、生きる術としての詩……。 “世界”と対峙するために詠んでいたと言っても過言ではありません。けれども、十七歳を過ぎたころになると、徐々に世界を受容する手立てを知り、周囲と然るべき距離を取ることが覚えました。“世界”と自分の間にある距離感、それはときに心地よく、とても愛おしいものでした。別の意味で他者を意識するようになった私は、再び世界に「適切ならざる私」を呈し、問いかけ、他者を含むあらゆる“存在”を確かめる必要を感じました。「適切ならざる私」が世界を受容していく物語であるこの詩集が、「適切ならざる自分」を抱えた誰かにひもとかれ、その方の目に見えぬ支えとなれば、これ以上の幸はありません。

鮮やかな絵でこの一冊に広がりを与えてくださった画家の森本めぐみさん、出版まで導いてくださった思潮社の亀岡大助さんへ心よりお礼申し上げます。そして、詩という私の産声に耳を傾けてくださった選考委員の方々、お世話をしてくださった賞の事務局の方々、皆様ありがとうございました。

二〇一〇年二月二〇日

文月 悠光

選考理由について

第十九回「丸山豊記念現代詩賞」の選考会は、平成二十二年二月八日（月）に、東京都三鷹市で開催されました。

昨年度中に刊行された詩集およそ三百冊のなかから、例年通りそれぞれの委員が候補作を持ち寄って選考を行いました。が、本年は一度の審査では受賞作の決定にはいたらず、その後数日をかけて再度検討し直した結果、文月悠光（ふづき・ゆみ）さんの『適切な世界の適切ならざる私』（思潮社）を受賞作として、久留米市の実行委員会に推薦する旨の報告をいたしました。

文月悠光さんは、札幌市在住。選考会時点では十八歳、高校生という若さです。歴代の受賞者中、最年少ということになります。文月さんは既に「詩学」「現代詩手帖」投稿欄の賞を受賞するなど高い評価を受けてきており、今回の詩集はその集大成という意味でも注目を集めていました。

透明なストーリーを通して美術室に響く

「スー、スー」という私の呼吸音。

語りかけても返事がないのなら

こうして息で呼びかけてみよう。

詩集冒頭の作品「落水水」の書き起こし部分ですが、このように多くの題材には学校（生活）が選ばれています。そして「私」は等身大の自分なので、随所に若い才能のきらめきが眩しいくらいの詩集と言えるでしょう。しかし私たち選考委員が第一に推したのは、単に若い才能の奔騰のみに見惚れたからではありません。彼女の美点は、むしろその逆のところにあつて、若さの過剰を如何に抑制するかに腐心している点にあると判断しました。ていねいに一行一行を検証し、筆先でやりすごしたような部分は一行もないと言ってよいでしょう。つまり、この詩集にはそうした「大人」の目が光っているのです。

同世代の読者に共感を得るのは当然でしょうが、「大人」の

鑑賞眼にも十二分に通用する一書として推薦いたします。

丸山豊記念現代詩賞選考委員 清水 哲男

高橋 順子

第二十回受賞作品 佐々木安美『新しい浮子 古い浮子』



受賞の言葉

第三詩集をだしたとき、丸山豊さんから思いがけずお葉書をいただきました。その中に、あとがきがあれば良かったね、というお言葉がありました。そうすれば書き手のすがたかたちがもつと見えて、詩を読むときの助けになると。お葉書の内容はむしろ苦言なのかしれませんが、いただいたことがうれしく、なんども読み返していました。あの時から二十五年後、まさかそのご本人の名前を冠した賞をいただけるとは思っていませんでした。さらに清水哲男さんと高橋順子さん。敬愛するおふたりに選ばれたことがうれしく光栄です。

「新しい浮子 古い浮子」出版元の栗売社は、井坂洋子さんと高橋千尋さんと三人で「一個」という同人誌を始めるとき考えた社名で、室生犀星の「栗売」という詩から取っています。

実際は雲の上にか存在しないようなものですが、発行人井坂洋子になっています。受賞を知った井坂さんは、自分のことよりうれしい、これが版元の気持なのかと言っていました。装幀は高橋千尋さん。千尋さんの真心のこもった絵と文字は、詩集刊行の大きな励ましになりました。一個の同人ふたりとも嘘のない誠実な人柄。才能豊かで控え目な性格。大切な友人です。

二〇〇四年冬、行方不明の私を捜していた松下育男さんと再会し、阿部恭久さんを加えた三人で同人誌「生き事」をやることになったときもいままも、詩を書くことに自発的な意思や意欲はなく、詩を書くことは自分の能力の限界を思い知らされるだけのつらい行為と思っています。けれども詩を書くことでここまで来た、私というすがたがたちかたがなんとか見えてきたという気もしています。今度の受賞は、読む人にもその輪郭がうつつらと見えて、私の吐く白い息やため息が、すこし感じられたということかもしれません。これからも井坂洋子さん、高橋千尋さんと力を合わせて、栗売社をやっていきます。ありがとうございます。

佐々木 安美

選考理由について

第二十回「丸山豊記念現代詩賞」の選考会は、二〇一一年二月七日（月）に、東京都三鷹市で開催されました。

昨年中に刊行された約三百冊の詩集の中から、例年どおりそれぞれの選考委員が候補作を持ち寄って選考を行いました。その結果、佐々木安美さんの詩集『新しい浮子 古い浮子』（栗売社）を受賞作として、久留米市の実行委員会に推薦する旨の報告をいたしました。

佐々木安美さんは一九五二年、山形県生まれの男性詩人です。一九八七年に詩集『さるやんまだ』で詩壇の新人登竜門ともい

うべき日氏賞を受賞し、輝かしい出発をしましたが、その三年後に『心のタカヒク』という詩集を出して以来、二十年間の沈黙がありました。現代詩書出版社発行の詩人住所録にもお名前が出ていません。

詩人であることをやめた歳月、佐々木さんは詩を書く代わりにフナを釣っていました。詩は詩人の実生活をそのまま描き出すというものではありませんが、この詩集では実生活からもたらされた心象に切実さがあります。

冒頭の詩「十二月田」はこんなふうに始まります。「詩を書くのをやめてから／フナを釣り始めた／詩を書く友人は少なくなり／ほとんどゼロになった／なぜ詩を書くようになったのかと／人に聞かれることもあるが／破壊したい衝動が／破壊を願う気が／嘔吐のようにこみあげてくる／詩が／音もなく／同じ食卓についている／微細な爆発／わたしを／じっと見ている／詩を／書かなくなったわたしを」。

一度詩に取り憑かれ、詩によって心の昂揚を味わった者は、詩を書かなくなっただけでも、書きたいと思う心を葬る事はできません。この詩の最終行はこうです。「いや／友だちということではないと思う／意味はない／わたしはもう／フナと違ってもいいものなのだ」。この詩集はかつて詩人であった人が再び詩人になった再生の記念碑ともいえましようが、自分を「フナ」といつてもいいものなのだ」と捉える虚無感というか静けさこそ、得難いものであると感じます。

別の詩には釣りをしているときには「わたしのありかはどこへともなくとけている」という一行がありますが、大自然の中で人を人たらしめている自負心や何かをすっぽり落して、フナであつてもいいし、無であつてもいいとする何か超越的な次元を呼吸しています。そこからは詩の水脈は案外近かったのです。

よう。

また、「光のページ」という詩では、「わたしの詩は／どこにあるのか／動かない／浮子の先端を見ている」とありますが、釣り竿の先に神経を集めている長い沈黙考の時間が再生を促したともいえるでしょう。やがて、「浮子が消しこむ／光のような生き物が／水の底からあがってくる」。「光のような生き物」はこのとき魚であることを超えて、ほとんど詩であるといえましよう。

釣りの詩の他に、ノンセンスの詩や夢と現実が交錯する詩の中にも不思議な手応えがあります。そこには生の原質ともいべきものが宿っているからでしょう。私たちは選考委員はその言葉の重さに敬意を表し、一致して推挙した次第です。

丸山豊記念現代詩賞選考委員

清水 哲男

高橋 順子

第二十一回受賞作品 市原千佳子『月しるべ』



受賞のことば

十九年ぶりの詩集という、詩の書き方すら忘れてしまった程の時間の果ての、この『月しるべ』に、大層な賞を賜り、光栄幸甚に存じます。

実は、この受賞の電話をいただいた時、「あっ、シンクロした」と直感しました。ちょうど、『わたし、少しだけ神さまとお話できるんです』という本を読み終えたばかりで、私はこの著者に逢いに行きたいという想いを胸の中で膨らませていました。その方は福岡市在住でしたから、久留米市からのありがたいお知らせは、本当に神秘的な驚きでした。「あっ、福岡県がわたしを呼んでいる！」という確信がイナズマのように走りまわりました。

私は常日頃から、どんなに偶然にみえる出来事でも、すべて必然の糸が絡み合ってその人に寄ってくるかと考えています。この度の神秘的必然を創ってくくださった、丸山豊記念現代詩賞実行委員会と選考委員の先生方に、この驚きと感動をお伝えし、深い感謝の意を表します。

私は七年半前に、三十五年暮らした東京を引き上げ、故郷の池間島にUターンしました。池間島は、沖縄本島からさらに二、三百キロメートル南下した所にあります。もともと半農半漁の島で、周囲が五、一キロメートルしかない小さな島です。現在は老人ばかりの島になってしまい、細々と砂糖黍やサツマイモやラッキョウが栽培されています。私も見よう見まねでね、先祖が残してくれた畑で時々あそびせてもらっています。

文学的には、沖縄県二大紙のひとつ、沖縄タイムスの「詩時評」を二年半続けてきましたが、今年その任を終え、批評することの苦しさから解放されて、ほっとしているところです。今、私が情熱を注いでいるのは、三年半まえに創刊した『宮古島文学』です。やっと8号までこぎ着けることができました。この同人誌を持続・充実させることが私の使命だと自覚している今日この頃です。

ありがとうございます。

選考理由について

市原さんは一九五一年、沖縄の池間島で生まれ、長じて東京に暮らしましたが、いまは古里に戻っています。その詩には南の島の濃く熱い血が流れています。たちまち繁茂する南の樹木の魅力があります。一読、性のおおらかさと罪、母性のかなしみとともに、島に伝わるはらかな宗教性に触れることができず。今日の繊細で稀薄で頭デッカチな詩群の中に置かれれば、あるいは粗削りの印象があるかもしれませんが、それも南国の巫女のみずみずしい筆力のゆえと考え、合意に漕ぎつけた次第です。

丸山豊記念現代詩賞選考委員 清水 哲男

高橋 順子

詩集『月しるべ』について

十九年ぶりに刊行された第四詩集。沖縄的といっているものの見方、考え方が本書の魅力とされます。

「風の家」という詩は「ひとは／風の家をもつていて／風の精霊を住まわせているそうな。／死んだおばあさんの教えです／風の家は／ひとのからだの最も天にちかい場所にあつて／渦巻いているそうな。／銀河のように」と始まりますが、南の島にはこんな美しい言い伝えがあつて、そこではいろいろな精霊や人のたましいがうようよしているようです。「生は死から生まれる」（「せつぶんせつぶん」）、また「生と死は そう離れてはいない／とでもいうように／生家と墓地はとても近い」（「幻島記」）などという表現があります。いま多くの土地で死は忌むべきもの、恐ろしいものとして直ちに隔離されますが、南の島では死と生は手をたずさえているようです。その風土が詩人に

詩を運んで来るようです。

「月しるべ」という表題作はありませんが、月への思慕が詩人の中にあるのでしよう。「死のしるべ／月しるべ／白道へ／つつましく／死を渡そうとして／わたしたちは手を振っている」（「十指白道」）という、月を死と同一視する一節がある一方で、「月／それは希望」（「地球繭」）ともうたいます。「希望」とは月の光が地球に「包帯を巻いてくれる」からというのですが、これらが矛盾することなく溶け合っているのが南の思考でありましよう。

市原さんには沖縄的なものが純粹培養されている気がします。詩人は現代の巫女として、やはり島の自然の中に戻ることによって、生きなおすことができたのでしよう。池間島は宮古島の北に浮かぶ珊瑚礁の美しい離れ小島ですが、島の人びとは海の彼方に別の世界があると語り伝えてきたようです。もともと島の詩を書いたらいいと思います。（高橋 記）